

# 研 究 報 告

## 第 23 号

愛による主体化……………	菅 利 恵	(1)
—シラーの劇作品をめぐる試論—		
言語起源論と E.T.A.ホフマンの動物……………	土 屋 京 子	(19)
—犬ベルガンサ、猿ミロと猫ムルの言語をめぐる—		
詩人と「子ども」の関係について……………	藤 原 美 沙	(47)
—アイヒェンドルフの小説『詩人とその仲間』より—		
Die Widerspiegelung des zeitgenössischen Englandbildes durch Tristan in Richard Wagners <i>Tristan und Isolde</i> …	YAMAZAKI Asuka	(63)
ホーフマンスタールの『アルケステイス』について……………	加 賀 ラ ビ	(83)
オリエントでの自分探し……………	武 田 良 材	(97)
—アンネマリー・シュバルツェンバハの『幸せの谷』—		
境界に立つショーペンハウアー……………	永 畑 紗 織	(117)
—ボブプロスキーの短編『窓辺の若い紳士』について—		

2009

京都大学大学院独文研究室

前略

この度、大学院生が中心になって編集しております『研究報告』第 23 号を発行いたしました。

掲載しました論文につきまして、忌憚のないご意見・ご指導・ご批判をお寄せいただければ幸いです。

草々

2009 年 12 月 15 日

京都大学大学院独文研究室

〒606-8501

京都市左京区吉田本町京都大学文学部内

Tel: 075-753-2826

## 訂正のお知らせ

### 表紙

(誤) : 「アンネマリー・シュバルツェンバハの『幸せの谷』」



(正) : 「アンネマリー・シュヴァルツェンバハの『幸せの谷』」

### バックナンバー S.142

(誤) : 「アンネマリー・シュバルツェンバハにおける反ナチス」



(正) : 「アンネマリー・シュヴァルツェンバハにおける反ナチス」

## 『研究報告』バックナンバー

### 第1号(1985)

- 大川 勇: ある深層の物語の読解 — ムー  
ジルの『特性のない男』研究のための序説  
金子 孝吉: リルケの詩『偶像』について  
田辺 玲子: 関係世界の創出 — アネッテ・  
フォン・ドロステ=ヒュルスホフの詩人像とそ  
の世界  
奥田 敏広: トーマス・マンの「モンタージュ技  
法」について — 小説形式のパロディー

### 第2号(1986)

- 松村 朋彦: 心理学と小説のあいだ — カー  
ル・フィリップ・モーリッツ『アントン・ライ  
ザー』とその周辺  
大川 勇: 千年王国を越えて — ムージルの  
『特性のない男』における〈別の状態〉の行  
方  
加藤 丈雄: 『公子ホムブルク』について — 死  
の恐怖とその超越を中心に  
奥田 敏広: リオン・フォイトヴァンガーの小説  
『成功』におけるヒトラー像について — 20  
年代の証言の一つとして

### 第3号(1988)

- 加藤 丈雄: ハッピーエンドと悲劇 — 『公子ホ  
ムブルク』の多義性について  
兵頭 俊樹: ヘルダーリンの‘Wie wenn am  
Feiertage...’に現れるディオニュソスの形  
象をめぐって  
竹本 まや: トーマス・マンの『すげかえられた  
首』試論  
友田 和秀: 『魔の山』試論 — 主人公ハンス・  
カストルプの形姿をめぐって

### 第4号(1990)

- 津田 保夫: 『ヴァレンシュタイン』試論 — ネメ  
シスの悲劇の観点から

- 千田 春彦: フライダングの『ベシヤイデンハイ  
ト』研究のために — 三つの《はざま》をて  
がかりとして  
宮田 眞治: 覚醒へ向けての夢想 — 『ハイン  
リッヒ・フォン・オフターディンゲン』試論(1)  
千田 まや: トーマス・マンの『ファウストゥス博  
士』 — デューラーの機能についての一考  
案  
斎藤 昌人: 一カフカ像 — 『流刑地にて』をめぐ  
って

### 第5号(1991)

- 青地 伯水: ホーフマンスタールの『厄介な男』  
における「なおざりにされた生」と「達成され  
た社会性」  
谷口 栄一: C. F. マイアーの『ユルク・イエナッ  
チュ』について — その多義性に関する一  
考察  
津田 保夫: 後期シラーの悲劇論に関する一考  
察 — 悲劇的恐怖の概念を中心に  
斎藤 昌人: 閉ざされる世界

### 第6号(1993)

- 片桐 智明: ヨーゼフ・ロートの『ラデツキー行進  
曲』 — 「比較」と「繰り返し」のモチーフを  
めぐって  
千田 春彦: デア・シュトリッカーの『閉じ込めら  
れた女房』について — 物語の重層構造  
の目指すもの  
福田 覚: 自然模倣説における真理媒介の構  
造(1) — レッシング(詩学)に潜在する模  
倣説の輪郭  
青地 伯水: W. ヒルデスハイマーの『リープ  
ローゼ・レゲンデン』におけるグロテスクなも  
のについての一考察

### 第7号(1994)

飛鳥井 雅友: 「しばしばそれは絶望的な対話  
なのです」 — パウル・ツェラーンにおける  
対話の概念をめぐって

吉田 孝夫: 時間の渦 — R・M・リルケ『新詩  
集』の数篇から

片桐 智明: ヨーゼフ・ロートの『右と左』 — 二  
つの方向

### 第8号(1995)

濱中 春: シラーの『マリア・ストゥアルト』 — 二  
人の女王のドラマ

中村 直子: 分離動詞の認定をめぐる諸問題

飛鳥井 雅友: 神学の拒否と詩学 — パウル・  
ツェラーンにおける神義論の問題

### 第9号(1996)

中村 直子: 正書法と分離動詞

濱中 春: シラーの『ヴィルヘルム・テル』におけ  
るスイスの風景

片桐 智明: ヨーゼフ・ロートの『百日天  
下』 — ヨーゼフ・ロートのワーテルロー

飛鳥井 雅友: 「胸は張り裂け」 — ゴットフリー  
ト・ベンの場合

### 第10号(1997)

濱中 春: シラーの『道遥』における風景をめぐ  
って — 風景の補償モデルとその矛盾

吉田 孝夫: ローベルト・ヴァルザーにおける寓  
話性(1) — 散文小品『通り(I)』について

片桐 智明: 物語の行方 — ヨーゼフ・ロートの  
『果てしない逃走』と『カプツィン派教会納骨  
堂』をめぐって

### 第11号(1998)

吉田 孝夫: ローベルト・ヴァルザーにおける寓  
話性(2) — 放蕩息子をめぐる二つの散文  
小品について

片岡 宜行: ドイツ語の与格の分類について

國重 裕: クリスタ・ヴォルフ『クリスタ・T への追  
想』について — その語りの構造

飛鳥井 雅友: ゴットフリート・ベンにおける〈抒  
情的自我〉概念の登場をめぐって

### 第12号(1999)

片岡 宜行: ドイツ語の与格と空間補足語につ  
いて

吉田 孝夫: ローベルト・ヴァルザーの絵画描写  
について — エクブラシスの観点から

片桐 智明: ハイミート・フォン・ドーデラー四十  
歳の小説 — 『最後の冒険』、騎士とドラゴ  
ンの小説

KUNISHIGE Yutaka (國重 裕): Zwischen  
Phantasiewelt und Wirklichkeit —  
Essay über Ilse Aichingers „Die  
größere Hoffnung“

### 第13号(1999)

KUNIEDA Naotaka (國枝 尚隆): *Wilhelm  
Tell als ästhetisches Projekt*

吉田 孝夫: ローベルト・ヴァルザーにおける通  
俗小説とメルヘンの再話について — 対  
句法に関する試論

### 第14号(2000)

廣川 智貴: 文体論の理論と実践 — クライス  
トの『ロカルノの女乞食』を例にして

佐々木 茂人: カフカの作品における歌のモ  
ティーフ — 『歌姫ヨゼフィーネ、あるいは  
ネズミ族』を中心に

國重 裕: オーストリア小説に見る《家族ドラマ》  
の変遷 — M.シュトレールヴィッツ『誘惑。』  
(1996)

### 第15号(2001)

伊藤 白: 『ブデンブローク家の人々』試験論 — 「市民と芸術家」の生み出す四つの類型から

池田 晋也: アルトゥール・シュニッツラーの『自由への道』 — 市民的なものと芸術的なもののあいだを浮遊する生

川島 隆: カフカの息子たち — 短篇「十一人の息子」読解

中原 香織: ヘルマン・ヘッセの『シッダールタ』について — 葛藤の不在がもたらす問題をめぐって

羽坂 知恵: 日常の「ヒーロー」 — ハインリヒ・ベルの『道化師の意見』について

### 第16号(2002)

佐々木 茂人: 東方ユダヤ人難民とプラハのユダヤ人 — カフカの伝記研究のために

川島 隆: 「こいつは途方もない偽善者だ」 — カフカの中国・中国人像

國重 裕: ユーゴスラヴィア内戦をめぐる西欧知識人の応酬 — ペーター・ハントケ『冬の旅』に対する議論を中心に

### 第17号(2003)

池田 晋也: 描かれた劇場 — シュニッツラーの短篇『侯爵様御臨席』

伊藤 白: ゼゼミ・ヴァイヒプロート — 『ブデンブローク家の人々』における女性像とキリスト教

川島 隆: ユダヤ人と中国人 — カフカにおける人種と性愛をめぐって

武田 良材: クラウス・マンの『メフィスト』 — ドイツ反ファシズム運動の失敗の反映として

### 第18号(2004)

廣川 智貴: 主語の文体論 — クライストの『決闘』を中心にして

熊谷 哲哉: 言葉をめぐるたたかい — シュレーバーと雑音の世界

ASAI Maho (浅井麻帆): Sehen im Wörterverbindungsraum bei Rainer Maria Rilke — Eine Wandlung vom Sehen hin zur Rose

川島 隆: 『万里の長城』における「男性」と「労働」の位置 — カフカのシオニズム理解を手がかりに

伊藤 白: 白いドレスのロッテ — トーマス・マン『ワイマールのロッテ』における女性像

武田 良材: 道徳的な女たち — ヘルマン・ケステン文学のモラリスト像

國重 裕: 現代文学は「歴史」を語りうるか? — Katrin Askan (1966~ )に見るDDR文学の現在

書評・文献紹介

### 第19号(2005)

青木 三陽: 手紙を書く騎士 — 『パルツィヴァール』における「学識」と「書物」の意味について

樋口 梨々子: 文学創作への萌芽としての音楽美学 — E.T.A.ホフマンの短編『ドン・ファン』試験論

寺井 紘子: ホフマンスタール文学における生と絵画

浅井 麻帆: ウィーン分離派館とヨーゼフ・マリア・オルブリヒ — 時代と分離派が求めた合目的性

熊谷 哲哉: 結び目としての神経 — シュレーバーにおける宇宙と身体

池田 あいの: 手紙論としての手紙 — カフカの恋文をめぐって

伊藤 白: ショーシャ夫人は美しいか — トーマス・マン『魔の山』における女性像と「東」

池田 晋也: ジャズアレンジされるヨーロッパ — ハンス・ヤノヴィッツの小説『ジャズ』

武田 良材: モラリストへの成長 — ヘルマン・ケステン文学のモラリスト像 その二  
書評・文献紹介

## 第20号(2006)

- 青木 三陽：歴史とフィクションの狭間で — ヴォルフラムの「原典言及」をめぐって
- 樋口 梨々子：E.T.A.ホフマンの『新旧の教会音楽』 — 「ロマン主義的なもの」との関連において
- 伊藤 白：フロイライン・エンゲルハルト — トーマス・マン『魔の山』における女性像と「同性愛」
- 廣川 香織：ハリー・ハラールの痛む足 — ヘルマン・ヘッセの『荒野のおおかみ』における身体について
- 池田 晋也：文学的ジャズ表象の諸形態 — ブルーノ・フランクとフェリクス・デールマン
- 武田 良材：モラリストの革命性 — ヘルマン・ケステン文学のモラリスト像 その三  
書評・文献紹介

## 第21号(2007)

- 寺井 紘子：芸術と芸術家 — ホーフマンスタールとリルケの場合
- 廣川 香織：叶えられた理想と失われた身体 — ヘッセ文学の転換期における「顔」のモチーフについて
- 永畑 紗織：ヨハネス・ボブロフスキーにおける闇と光 — 『ねずみのおまつり』を中心に
- ヴェレーナ・ルツチュマン(川島隆 訳)：たくましい少女たち、繊細な少年たち — ヨハンナ・シュペーリの児童文学作品について  
書評・文献紹介

## 第22号(2008)

- 土屋 京子：プロメテウスの火とE.T.A.ホフマンの『G.町のジェズイット教会』
- 藤原 美沙：子どもへ向ける視線 — アイヒェンドルフの2篇の詩より
- YAMAZAKI Asuka (山崎 明日香)：Das Verschwinden der Differenzierung in der Todesgemeinschaft in Richard Wagners *Tristan und Isolde*

- 浅井 麻帆：「セセッション」から「分離派」へ — 日本の Wiener Secession 受容史における訳語の変遷について
- 武田 良材：アンネマリー・シュバルツェンバハにおける反ナチス — エーリカ、クラウス・マン、そして山との関係
- 永畑 紗織：異教の神ペルーンとサルマチア — ボブロフスキーの短編『異教徒たちの至福』について
- 菅 利恵：ドイツにおける「ドイツ — トルコ」二言語教育 — 複言語主義とドイツ語教育のはざままで
- BID(伊藤白 訳)：『図書館が良い21の理由』  
書評・文献紹介

# INHALT

SUGA Rie :	
Identitätsbildung durch Liebe	
— Ein Versuch über Schillers Dramen .....	(1)
TSUCHIYA Kyoko :	
Der Ursprung der Sprache und E.T.A.Hoffmanns Tierfiguren	
— Am Beispiel des Hundes Berganza, des Affen Milo und des Katers Murr ....	(19)
FUJIWARA Misa :	
Der Dichter und die Kinder	
— Über Eichendorffs Roman <i>Dichter und ihre Gesellen</i> .....	(47)
YAMAZAKI Asuka :	
Die Widerspiegelung des zeitgenössischen Englandbildes durch Tristan in Richard Wagners <i>Tristan und Isolde</i> .....	(63)
KAGA Rabi :	
Über Hofmannsthals <i>Alkestis</i> .....	(83)
TAKEDA Yoshiki :	
Selbstsuche im Orient	
— Annemarie Schwarzenbachs Roman <i>Das glückliche Tal</i> .....	(97)
NAGAHATA Saori :	
Schopenhauer an der Grenze	
— Über Bobrowskis Erzählung <i>Junger Herr am Fenster</i> .....	(117)

## 研究報告 第 23 号

非売品

2009 年 12 月発行

発行所 京都大学大学院独文研究室 研究報告 刊行会

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

京都大学文学部内

TEL075-753-2826

郵便振替 01060-2-38520

印刷所 北斗プリント社

〒606-0864 京都市左京区下鴨高木町 38-2